PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number:

2003-192327

(43)Date of publication of application: 09.07.2003

(51)Int.CI.

HO1M 4/58 // HO1M 4/02 H01M 10/40

(21)Application number: 2001-393329

(71)Applicant :

SHIN ETSU CHEM CO LTD

(22)Date of filing:

26.12.2001

(72)Inventor:

FUKUOKA HIROFUMI

UENO SUSUMU ARAMATA MIKIO MOMII KAZUMA MIYAWAKI SATORU

(54) METHOD OF AND DEVICE FOR PRODUCING METALLIC ELEMENT- DOPED SILICON OXIDE POWDER

(57)Abstract:

PROBLEM TO BE SOLVED: To provide a metallic element-doped silicon oxide powder in which a lithium ion secondary battery having a high capacity and excellent in both initial charge/discharge efficiency and cycle characteristic can be obtained by the use thereof as a negative electrode active material for the above secondary battery.

SOLUTION: This metallic element-doped silicon oxide powder is produced by heating a raw material powder mixture containing silicon dioxide powder in the presence of an inert gas or under a reduced pressure within a temperature range of 1,100-1,600° C, generating gaseous silicon oxide, heating the metals or metal compounds except silicon, or the mixture thereof to generate their vaporized gases, and depositing the mixture of the gaseous silicon oxide and vaporized metallic gases on the surface of a substrate cooled to 100-500° C.

LEGAL STATUS

[Date of request for examination]

28.06.2004

[Date of sending the examiner's decision of rejection]

[Kind of final disposal of application other than the examiner's decision of rejection or application converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number]

[Date of registration]

[Number of appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of requesting appeal against examiner's decision of

rejection]

[Date of extinction of right]

Copyright (C); 1998,2003 Japan Patent Office

(19)日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11)特許出顧公開番号 ✓ 特開2003-192327 (P2003-192327A)

(43)公開日 平成15年7月9日(2003.7.9)

(51) Int.Cl. ⁷	識別記号	FI	テーマコート*(参考)
C01B 33/1		C 0 1 B 33/113	Z 4G072
H01M 4/5		H 0 1 M 4/58	5H029
// HO1M 4/0	2	4/02	D 5H050
10/4)	10/40	Z
		審査請求・未請求・請求項の	数3. OL. (全. 6. 頁)
(21)出願番号	特願2001-393329(P2001-393329)	(71) 出願人 000002060	
		信越化学工業株	
(22) 出顧日	平成13年12月26日(2001.12.26)	東京都千代田区大手町二丁目6番1号	
		(72)発明者 福岡 宏文	•
	,	群馬県安中市磯	部2丁目13番1号 信越化
		学工業株式会社	群馬事業所内
		(72)発明者 上野 進	
		群馬県安中市磯	部2丁目13番1号 信越化
		学工業株式会社	群馬事業所内
		(74)代理人 100079304	
		弁理士 小島	隆司 (外1名)
			最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 金属元素ドープ酸化珪素粉末の製造方法及び製造装置

(57) 【要約】

【解決手段】 二酸化珪素粉末を含む混合原料粉末を不活性ガスの存在下もしくは減圧下1100~1600℃の温度範囲で加熱し、酸化珪素ガスを発生させる一方、珪素以外の金属もしくは金属化合物又はそれらの混合物を加熱し、金属蒸気ガスを発生させ、上記酸化珪素ガスと上記金属蒸気ガスとの混合ガスを100~500℃に冷却した基体表面に析出させることを特徴とする金属元素ドープ酸化珪素粉末の製造方法。

【効果】 本発明の金属元素ドープ酸化珪素をリチウム イオン二次電池負極活物質として用いることで、高容量 でかつ初回充放電効率及びサイクル特性の優れたリチウ ムイオン二次電池を得ることができる。

40

【特許請求の範囲】

【請求項1】 二酸化珪素粉末を含む混合原料粉末を不活性ガスの存在下もしくは減圧下1100~1600℃の温度範囲で加熱し、酸化珪素ガスを発生させる一方、珪素以外の金属もしくは金属化合物又はそれらの混合物を加熱し、金属蒸気ガスを発生させ、上記酸化珪素ガスと上記金属蒸気ガスとの混合ガスを100~500℃に冷却した基体表面に析出させることを特徴とする金属元素ドープ酸化珪素粉末の製造方法。

【請求項2】 上記金属がA1、B、Ca、K、Na、Li、Ge、Mg、Co及びSnから選ばれる1種又は2種以上であることを特徴とする請求項1記載の金属元素ドープ酸化珪素粉末の製造方法。

【請求項3】 二酸化珪素粉末を含む混合原料を反応させて酸化珪素ガスを発生させる反応室Aと、珪素以外の金属もしくは金属化合物又はそれらの混合物を加熱して金属蒸気ガスを発生させる反応室Bと、反応室Aと反応室Bを接続し、上記2種類のガスを混合、搬送させるガス搬送ラインと、搬送された混合ガスを冷却した基体表面に析出させる析出室とを有する金属元素ドープ酸化珪 20素の製造装置。

【発明の詳細な説明】

[0001]

【発明の属する技術分野】本発明は、各種機能性を有する金属元素ドープ酸化珪素粉末の製造方法及びその製造装置に関するもので、特にリチウムイオン二次電池用負極材に適した金属元素ドープ酸化珪素粉末の製造方法及びその製造装置に関する。

[0002]

【従来の技術】近年、携帯型の電子機器、通信機器等の著しい発展に伴い、経済性と機器の小型化、軽量化の観点から、高エネルギー密度の二次電池が強く要望されている。従来、この種の二次電池の高容量化策として、例えば、負極材料にV、Si、B、Zr、Sn等の酸化物及びそれらの複合酸化物を用いる方法(特開平5-174818号公報、特開平6-60867号公報他)、溶湯急冷した金属酸化物を負極材として適用する方法(特開平10-294112号公報)、負極材料に酸化珪素を用いる方法(特許第2997741号公報)、負極材料に登水珪素を用いる方法(特許第2997741号公報)、負極材料にSi2N2〇及びGe2N2〇を用いる方法(特開平11-102705号公報)等が知られている。

[0003]

【発明が解決しようとする課題】しかしながら、上記従来の方法では、充放電容量が上がり、エネルギー密度が高くなるものの、サイクル性が不十分であったり、市場の要求特性には未だ不十分であったりし、必ずしも満足でき得るものではなく、さらなるエネルギー密度の向上が望まれていた。

【0004】その中でも、負極材料に酸化珪素を用いる方法(特許第2997741号公報)では、非常に高容

量のリチウムイオン二次電池は得られるものの、サイク ル性が不十分である。

2

【0005】本発明は上記事情に鑑みなされたものであり、高容量でかつサイクル低下のなく、しかも初回充放電時における不可逆容量の少ないリチウムイオン二次電池用負極材として適した金属元素ドープ酸化珪素粉末の製造方法及びその製造装置を提供することを目的とする。

[0006]

【課題を解決するための手段及び発明の実施の形態】本 発明者らは、上記目的を達成するために鋭意検討を行 い、特に潜在的に高容量化が図れると考えられる酸化珪 素について種々検討を行った結果、酸化珪素に他の金属 元素を原子状に分散、ドープさせ、この金属元素ドープ 酸化珪素粉末を負極材として用いることで、高容量を維 持しつつサイクル劣化のない、しかも初回充放電時の不 可逆容量の少ないリチウムイオン二次電池が製造できる ことを見出し、本発明を完成した。

【0007】従って、本発明は(1)二酸化珪素粉末を 含む混合原料粉末を不活性ガスの存在下もしくは減圧下 1100~1600℃の温度範囲で加熱し、酸化珪素ガ スを発生させる一方、珪素以外の金属もしくは金属化合 物又はそれらの混合物を加熱し、金属蒸気ガスを発生さ せ、上記酸化珪素ガスと上記金属蒸気ガスとの混合ガス を100~500℃に冷却した基体表面に析出させるこ とを特徴とする金属元素ドープ酸化珪素粉末の製造方 法、及び、(2)二酸化珪素粉末を含む混合原料を反応 させて酸化珪素ガスを発生させる反応室Aと、珪素以外 の金属もしくは金属化合物又はそれらの混合物を加熱し て金属蒸気ガスを発生させる反応室Bと、反応室Aと反 応室Bを接続し、上記2種類のガスを混合、搬送させる ガス搬送ラインと、搬送された混合ガスを冷却した基体 表面に析出させる析出室とを有する金属元素ドープ酸化 珪素の製造装置を提供する。

【0008】以下、本発明について更に詳しく説明する。

【0009】本発明の金属元素ドープ酸化珪素粉末の製造方法において、酸化珪素ガスを発生させる原料としては、二酸化珪素粉末とこれを還元する粉末との混合物を用いる。具体的な還元粉末としては、金属珪素化合物、炭素含有粉末等が挙げられるが、特に金属珪素粉末を用いたものが、 反応性を高める、 収率を高めるといった点で効果的であり、好ましく用いられる。

【 $0\ 0\ 1\ 0$ 】 この場合、二酸化珪素とこれを還元する粉末との割合は適宜選定されるが、 $S\ i\ O_x$ (x=0.9~1.6、特に1.0~1.2)で示される酸化珪素を形成し得るように選定される。

【0011】本発明では、上記混合原料粉末を反応室A 内において1100~1600℃、好ましくは1200 50 ~1500℃の温度に加熱、保持し、酸化珪素ガスを生 成させる。反応温度が1100℃未満では、反応が進行 し難く生産性が低下してしまうし、1600℃を超える と、混合原料粉末が溶融して逆に反応性が低下したり、 炉材の選定が困難になる恐れがある。

【0012】一方、酸化珪素にドープさせる金属元素は、上記混合粉末以外(珪素以外)の金属もしくは金属化合物又はそれら混合物を反応室B内で加熱、保持し、金属ガスを発生させる。この場合、加熱温度は酸化珪素にドープさせる金属の蒸気圧及びあらかじめ設定された金属ドープ量によって決定され、例えば、酸化珪素に同等量ドープさせたい場合には、ほぼ酸化珪素ガスと同じ蒸気圧となる温度に設定すれば良い。なお、ここで金属元素の蒸気圧が酸化珪素の蒸気圧に近い金属元素をドープさせる場合においては、酸化珪素ガス発生原料と金属元素発生原料とを混合し、1つの反応室で同時に行うこともできる。

【0013】この場合、上記炉内雰囲気は不活性ガスもしくは減圧下であるが、熱力学的に減圧下の方が反応性が高く、低温反応が可能となるため、減圧下で行うことが望ましい。

【0014】また、上記酸化珪素にドープさせる金属は、導電性を付与することが可能なこと、リチウムイオンのドープ、脱ドープに適した結晶構造(スピネル構造)の制御が可能なことを考慮すると、Al、B、Ca、K、Na、Li、Ge、Mg、Co及びSnの1種又は2種以上が好ましく用いられる。

【0015】なお、上記酸化珪素にドープさせる金属のドープ量は、特に限定されず、目的、用途に応じて適宜選定されるが、一般的には、ドープ後の酸化珪素粉末の全体(重量)に対して3~70重量%、好ましくは5~50重量%程度とすることができる。この金属のドープ量が3%より少ないとその効果を有効に発現することができない場合があり、また70重量%より多いと、SiOの含有量が低下し、充放電容量が低下することとなり、結果的にSiOの能力を十分発揮させることができない場合がある。

【0016】上記反応室A及びB内で生成した2種類のガスは、ガス搬送ライン内で混合され、この混合ガスはガス搬送ラインを介して析出室に供給する。

【0017】この場合、搬送ラインは、1000℃を超え1300℃以下、より好ましくは1100~1200℃に加熱、保持することが望ましい。ここで、搬送管を加熱する目的は、搬送管内壁への酸化珪素蒸気の析出防止であり、搬送管の温度が1000℃以下では、酸化珪素ガスを含む混合ガスが搬送管内壁に析出・付着し、運転上支障を生じ、安定的な連続運転ができなくなる恐れがある。逆に1300℃を超える温度に加熱しても、それ以上の効果は見られないばかりか、電力コストの上昇を招いてしまう。

【0018】上記析出室には、冷媒により冷却された基

体が配置され、この析出室内に導入された上記混合ガス がこの冷却基体に接触、冷却されることにより、この基 体上に酸化珪素を含む生成物が析出する。ここで、基体 表面の温度は100~500℃に制御する必要がある。 基体表面の温度が100℃未満では、生成物のBET比 表面積が 300 m^2 /gより大きくなり、表面酸化によ り不活性な二酸化珪素の割合が大きくなり、リチウムイ オン二次電池負極材として用いた場合、高容量の電池が 得られない。逆に基体表面の温度が500℃より高いと BET比表面積が3m²/g未満となり、活性が低下 し、高容量の電池が得られない。なお、基体表面温度に よるBET比表面積の変化の原因については定かではな いが、基体表面の温度を上げることにより、析出物表面 の活性が高まり、その結果、融着により緻密化し、BE T比表面積が低下するものと推測される。また、基体表 面の温度については、析出室内温度(析出室ヒーターに より加熱)及び冷媒の種類、流量の組合せにより制御さ れる。また、冷媒の種類については特に限定しないが、 水、熱媒といった液体、空気、窒素といった気体がその 20 目的によって使われる。また、基体の種類も特に限定し ないが、加工性の点で、SUSやモリブデン、タングス テンといった高融点金属が好適に用いられる。

4

【0019】上記基体上に析出した金属元素ドープ酸化 珪素は、掻き取り等の適宜な手段により回収する。ま た、回収した酸化珪素粉末は、必要により適宜手段で粉 砕し、所望の粒径とすることができる。

【0020】上記方法に用いる装置としては、例えば図 1に示すような装置を用いることができる。ここで、図 1において、1は反応炉Aであり、この反応炉A1内に 30 マッフルA2が配設されている。このマッフルA2内は 反応室A3となっており、この反応室A3内に二酸化珪 素粉末を含む混合原料粉末4を収容する原料容器A5が 配置されている。また、マッフルA2を取り囲むように ヒーター6が配設され、このヒーター6により上記混合 原料4が加熱され、酸化珪素ガスが発生するようになっ ている。なお、7は断熱材である。

【0021】一方、8は反応炉Bであり、上記と同様に、この反応炉B8内にマッフルB9が配設され、このマッフルB9内が反応室B10となっており、この反応室B10内に他の金属もしくは金属化合物又はそれらの混合物の粉末11を収容する原料容器B12が配置されている。また、マッフルB9を取り囲むようにヒーター13が配設され、このヒーター13により上記粉末11が加熱され、金属元素ガスが発生するようになっている。なお、14は断熱材である。

【0022】また、15は、上記両反応室A3及びB1 0に連通し、これら反応室A3及びB10において生成 した上記酸化珪素ガス及び金属元素ガスが流入、混合さ れる搬送ラインで、ヒーター16が埋設されている。上 50 記搬送ライン15は、更に内部に析出室17が形成され

6

た析出槽18の骸析出室17に連通し、上記各反応室A 3及びB10内で発生した2種類のガスは、搬送ライン 15で混合し、搬送ライン15を通って上記析出槽18 内の析出室17に導入される。この析出室17内にはヒ ーター19が配設されていると共に、基体20が配設さ れている。この基体20内には冷却通路が形成されてお り、冷媒導入管21より冷媒通路に供給された冷媒によ り上記基体20が冷却され、上記酸化珪素を含む混合ガ スがこの冷却基体20に接触、冷却されることにより、 基体20上に金属元素ドープ酸化珪素粉末が析出される ようになっている。なお、22は冷媒排出管である。ま た、冷却基体20には熱電対23が埋設され、冷却基体 20表面温度を測定することができる。24は真空ポン プであり、この真空ポンプ24を作動させることによ り、析出室17、搬送ライン15、更に両反応室A3及 びB10内が減圧されるようになっている。

【0023】次に、本発明で得られた金属元素ドープ酸化珪素は、これを負極材としてリチウムイオン二次電池を製造することができる。

【0024】この場合、得られたリチウムイオン二次電池は、上記負極活物質を用いる点に特徴を有し、その他の正極、負極、電解質、セパレータ等の材料および電池形状等は限定されない。たとえば、正極活物質としてはしiCoO2、LiNiO2、LiMn2O4、 V_2O_6 、MnO2、TiS2、MoS2等の遷移金属の酸化物およびカルコゲン化合物等が用いられる。電解質としては、たとえば、過塩素酸リチウム等のリチウム塩を含む非水溶液が用いられ、非水溶媒としてはプロピレンカーボネート、エチレンカーボネート、ジメトキシエタン、 γ -ブチロラクトン、2-メチルテトラヒドロフラン等の単体または2種類以上を組合せて用いられる。また、それ以外の種々の非水系電解質や固体電解質も使用できる。

【0025】また、本発明の金属元素ドープ酸化珪素は、黒鉛等導電剤を添加することができ、この場合においても導電剤の種類は特に限定されず、構成された電池において、分解や変質を起こさない電子伝導性の材料であれば良く、具体的にはA1、Ti、Fe、Ni、Cu、Zn、Ag、Sn、Si等の金属粉末や金属繊維、又は天然黒鉛、人造黒鉛、各種のコークス粉末、メソフェーズ炭素、気相成長炭素繊維、ピッチ系炭素繊維、PAN系炭素繊維、各種の樹脂焼成体等の黒鉛を用いることができる。

[0026]

【実施例】以下、実施例及び比較例を挙げて本発明を具体的に説明するが、本発明は下記実施例に限定されるものではない。なお、下記例でw t %は重量%を示す。

【0027】[実施例1]図1に示す製造装置を用いて、 Tiドープ酸化珪素粉末を製造した。酸化珪素ガス発生 原料は、二酸化珪素粉末(BET比表面積=約200m ²/g)粉末と金属珪素粉末(BET比表面積=約3m²

/g)を等量モルの割合で攪拌混合機を用いて混合した 混合粉末であり、反応室A3の有効容積が15Lの反応 炉A1内に200g仕込んだ。一方、Tiガス発生原料 としてTiを用い、これを反応室B10の有効容積が1 5 Lの反応炉 B 8 内に 2 0 0 g 仕込んだ。次に真空ポン プ24を用いて、炉内を0.1Torr以下に減圧した 後、ヒーター6及びヒーター13を加熱し、反応炉Aを 1350℃ (SiO蒸気圧 3Torr)、反応炉Bを 2100℃(Ti蒸気圧 3Torr)に加熱保持し 10 た。一方で、搬送ライン15を1100℃に、析出槽1 8を850℃に加熱保持し、冷媒導入管21に水を5N L/min流入し、SUS製の基体20を冷却した。な お、この時の基体20の表面温度は熱電対23により測 定され、約180℃であった。この運転を5時間行った 後、室温まで冷却し、観察を行った結果、基体20上に 黒色物210gの生成が認められた。この黒色物を分析 した結果、BET比表面積=35m²/g、Ti含有量 =43wt%のTiドープ酸化珪素であった。

【0028】次に、この中間体100gを2Lアルミナ製ポールミルにて粉砕、媒体として $\phi5$ mmアルミナポール1000g、溶液としてヘキサン500gを用い、1rpmの回転条件にて湿式粉砕を行った。粉砕後のTiドープ酸化珪素粉末は、平均粒子径 7.3μ m、BET比表面積=40.2m 2 /g、Ti含有量=42.5wt%の粉末であった。

【0029】電池評価

次に、以下の方法で、得られたTiドープ酸化珪素粉末 を負極活物質として用いた電池評価を行った。

【0030】まず、得られたTiドープ酸化珪素粉末に 人造黒鉛(平均粒子径 5μ m)を炭素の割合が40wt%となるように加え、混合物を製造した。この混合物に ポリフッ化ピニリデンを10wt%加え、更にN-メチ ルピロリドンを加え、スラリーとし、このスラリーを厚 さ 20μ mの銅箔に塗布し、120で1時間乾燥後、 ローラープレスにより電極を加圧成形し、最終的には20mmに打ち抜き、負極とした。

【0031】ここで、得られた負極の充放電特性を評価するために、対極にリチウム箔を使用し、非水電解質として六フッ化リンリチウムをエチレンカーボネートと1、2ージメトキシエタンの1/1(体積比)混合液に1モル/Lの濃度で溶解した非水電解質溶液を用い、セパレーターに厚さ30μmのポリエチレン製微多孔質フィルムを用いた評価用リチウムイオン二次電池を作製した。

【0032】作製したリチウムイオン二次電池は、一晩室温で放置した後、二次電池充放電試験装置((株)ナガノ製)を用い、テストセルの電圧が0Vに達するまで1mAの定電流で充電を行い、0Vに達した後は、セル電圧を0Vに保つように電流を減少させて充電を行っ

50 た。そして、電流値が20μΑを下回った時点で充電を

終了した。放電は1mAの定電流で行い、セル電圧が 1.8Vを上回った時点で放電を終了し、放電容量を求 めた。

【0033】以上の充放電試験を繰り返し、評価用リチ ウムイオン二次電池の10サイクル後の充放電試験を行 った。その結果、初回充電容量:920mAh/g、初 回放電容量:850mAh/g、初回充放電時の効率: 92. 4%、10サイクル目の放電容量:780mAh /g、10サイクル後のサイクル保持率:91.7%の 髙容量であり、かつ初回充放電効率及びサイクル性に優 れたリチウムイオン二次電池であることが確認された。 【0034】[実施例2]実施例1と同様な方法でLiド ープ酸化珪素を製造した。Liガス発生原料としてはL iを用い、グローブボックス内にてLi粉末200gを ポリエチレン製袋に入れ、密封した状態を維持したま ま、反応炉B内に仕込んだ。反応炉Bは770℃(Li 蒸気圧 3 Torr) に加熱保持した。その他は実施例 1と同様である。その結果、基体20表面に黒色物22 0gの生成物を製造することができた。この黒色物を分 析した結果、BET比表面積=28m²/g、Li含有 量=51wt%のLiドープ酸化珪素であった。次に実 施例1と同様な方法で粉砕を行い、平均粒子径7.1μ m、BET比表面積=37.5m²/gの粉末を得た。

【0035】得られたLiドープ酸化珪素粉末を負極材とし、実施例1と同様な方法で電池評価を行った結果、初回充電容量:780mAh/g、初回放電容量:750mAh/g、初回充放電時の効率:96.2%、10サイクル目の放電容量:730mAh/g、10サイクル後のサイクル保持率:97.3%のサイクル性の優れたリチウムイオン二次電池であることが確認された。

【0036】[比較例]反応炉Bに金属、金属化合物を仕込まず、反応炉Bを加熱しない他は実施例1と同様な方法で、金属元素をドープしない酸化珪素粉末を製造した。その結果、純度99.5%の酸化珪素を120g製造できた。次に実施例1と同様な方法で粉砕を行い、平均粒子径 8.1μ m、BET比表面積=35.2m 2 /gの金属元素を含まない高純度酸化珪素粉末を得た。

【0037】得られた酸化珪素粉末を負極材とし、実施 例1と同様に電池評価を行った。その結果、初回充電容 **冊:900mAh/g、初回放電容量:650mAh/g、初回充放電時の効率:72.2%、10サイクル目の放電容量:500mAh/g、10サイクル後のサイクル保持率:76.9%の高容量ではあるが、明らかに実施例に比べサイクル性の劣る二次電池であった。**

8

[0038]

【発明の効果】本発明の金属元素ドープ酸化珪素をリチウムイオン二次電池負極活物質として用いることで、高容量でかつ初回充放電効率及びサイクル特性の優れたリ10 チウムイオン二次電池を得ることができる。

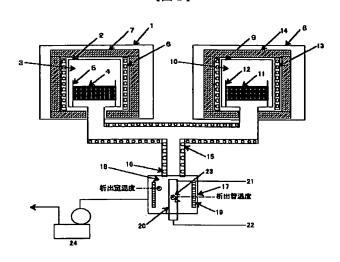
【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の一実施例に係る製造装置の概略断面図 である。

【符号の説明】

- 1 反応炉A
- 2 マッフルA
- 3 反応室A
- 4 混合原料粉末
- 5 原料容器A
- 0 6 ヒーター
 - 7 断熱材
 - 8 反応炉B
 - 9 マッフルB
 - 10 反応室B
 - 11 金属粉末
 - 12 原料容器B
 - 13 ヒーター
 - 14 断熱材
 - 15 搬送ライン
- 30 16 ヒーター
 - 17 析出室
 - 18 析出槽
 - 19 ヒーター
 - 20 基体
 - 21 冷媒導入管
 - 22 冷媒排出管
 - 2 3 熱電対
 - 24 真空ポンプ

【図1】



フロントページの続き

(72)発明者 荒又 幹夫

群馬県安中市磯部2丁目13番1号 信越化

学工業株式会社群馬事業所内

(72)発明者 籾井 一磨

群馬県安中市磯部2丁目13番1号 信越化

学工業株式会社群馬事業所内

(72)発明者 宮脇 悟

群馬県安中市磯部2丁目13番1号 信越化

学工業株式会社群馬事業所内

Fターム(参考)・4G072 AA24 AA38 BB05 GG03 HH14

LL03 MM01 RR11 UU30

5H029 AJ02 AJ03 AJ05 AL02 AL11

AM03 AM04 AM05 AM07 CJ02

CJ08 CJ15 CJ28 CJ30 DJ16

HJ14

5H050 AA02 AA07 AA08 BA16 CB02

CB11 FA17 GA02 GA10 GA16

GA27 GA29 HA14